Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

書評『丹波の歴史文化を探る』：古文書から分かった江戸時代の村のすがた』（時評・書評・展示評）

藪田，貫

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,4:99-103

(Issue Date)
2012-08

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81004258

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004258

時評・書評・展示評

Current Topics & Reviews

書評『丹波の歴史文化を探る』／『古文書から分かった江戸時代の村のすがた』

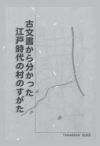
藪田　貫

一

『史学雑誌』恒例の企画「回顧と展望」を、大阪大学大学院教授村田路人氏と共同で取りまとめる機会を持った。双方の院生十二名の協力を得て、二〇一一年の歴史学界／近世の部を同誌五月号に掲載することができたが、総説の項に、つぎのように書いた。

ところで近年、「地域連携」を謳わない大学は日本にはない、と思われるほど各地で大学と地域、自治体・商店街・NPOなどとの連携事業が進み、多数の研究者、学生・院生がそれに関わっている。その特徴は、一九八〇年代に優勢であった自治体史編纂を経験した身からいうと、発想も仕組みも目的も大きく異なる。一言で言ってしまうと、そこには「行政と大学研究者の指導する市町村史」という構図から、「地元住民主導の地域再生に行政と研究者が参画する」という構図への転換があると思われる。このような趨勢は、やがて新しい資質を備えた若手研究者を生み出すことになるのではないか。

この時、わたしがいま代表を勤める関西大学大阪都市遺産研究センターももちろん念頭にあったが、もっとも強く意識していたのは、神戸大学大学院人文学研究科地域連携



丹波市教育委員会・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『丹波の歴史文化を探る』

丹波市教育委員会
2011年3月発行
A5判　89頁
非売品

棚原自治会パワーアップ事業推進委員会編『古文書から分かった江戸時代の村のすがた』

棚原自治会パワーアップ事業推進委員会
2011年3月発行
A5判　74頁
非売品

センターである。同センターについては、それを主導している奥村弘氏による『大震災と歴史資料保存』（吉川弘文館、二〇一二年）が本年二月に刊行され、阪神淡路大震災を契機とする設立と活動の経緯を詳しく知ることができる。奥村氏らの活動は、（A）大規模震災における歴史資料の保全という方向にまず向かった（その後、災害資料の保存活用と記憶の伝承に展開する）が、さらに（B）「豊かな地域歴史文化を生み出す」方向にも進展した。その結果、兵庫県丹波市や小野市など、県内自治体との共同による地域歴史文化の創造に関わるようになった。本稿で寸評する二書は、そのような兵庫県内の地域連携を通じて生み出されたものである。

とくに留意していいのは、兵庫県は摂津・淡路・播磨・丹波・但馬と旧国制の五ヶ国に及ぶ広さを持ちながら、その中に人文系で大学院を持つ大学は神戸大学など数えるほどしかないという、地域の広がりと大学の少なさのアンバランスである。関西大学も大阪大学も大阪市立大学も、大阪商業大学も関われる都市大阪の研究密度とは比べようがないのである。したがって神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの活動は、多方面に展開せざるを得ず、そのため大学院生や修了生といった若手研究者の従事する度合いが高まる。その結果、「やがて新しい資質を備えた若手研究者を生み出すことになるのではないか」という期待が生まれるのである。

わたしの期待が実現されるのは、おそらく一〇年以上後のことであろうが、彼ら若手が関わった本二書を紐解くことで、その可能性のほどを確かめることはできるだろう。批評に当たってわたしが予想するのは、その点である。

二

『丹波の歴史文化を探る』（以下、『探る』と略記する）と『古文書から分かった江戸時代の村のすがた』（略称『すがた』）は、ともに平成二三年三月の刊行であるが、事業の開始には時差がある。

先行したのは『すがた』の方で、平成一六年に立ち上げられた住民組織「棚原パワーアップ事業推進委員会」に、平成一八年から同センターが協力することで、二三年の『すがた』発刊となる。一方、『探る』は、平成一九年八月に、兵庫県丹波市とセンターとの間で結ばれた「地域活性化の連携協力に関する協定」に従って行なわれた調査活動と古文書講座・相談会などの成果である。その意味で事業に連続性があるのだが、『すがた』の母胎となった「棚原パワーアップ事業推

進委員会」が、丹波市春日町の一コミュニティの事業であるのに対し、『探る』は、丹波市の山南町・市島町・柏原町・青垣町・春日町・氷上町の六自治体が地盤である。言い換えれば、基礎となった自治体が広がりながら、「市内の歴史的文化遺産をあらためて見つめ直し、地域の活性化に繋げていきたい」という精神は一貫しているのである。

したがって主人公は、あくまで市民。「より多くの市民のみなさんに古文書や歴史的文化遺産の情報提供や調査活動へのご協力」（『探る』ごあいさつ）とあるように市民に呼びかけられ、「庚申堂に残されていた古文書を使って、皆さんが歴史を調べてください」（『すがた』七一頁）と地域住民の主体性が求められることとなる。新しい地域史に顕著なのは、「地元住民主導の地域再生に行政と研究者が参画する」という構図である。

その主体性はどうして養成され、担保されるのか。これに対する回答は、『すがた』まえがきに明らかである。「地域に残された数多くの古文書の調査」「古文書を読む会の開催」「古文書の展示及び解説セミナーの開催」が、それである。地域住民が、地域の歴史資料を発掘し、解読し、理解すること、そこにセンターが進める地域連携の真髄がある。したがってその成果の全貌は、本書のような刊行物だけでなく、それに至る過程で行なわれるさまざまな行事にも刻まれている。『探る』の末尾に彙報として活動記録が付けられているのは、そのプロセスを知る上で有益である。

右記の方法論の中でもセンターが基軸に置いたのは、地域住民と共同の古文書調査と並んで設けられた古文書講座であった。前者の象徴が、棚原地区の庚申堂保管文書一〇〇〇点の調査と目録取りである。他方、後者は、『すがた』にも『探る』にも反映されている。『すがた』では、第一部村誌編と第二部資料編、『探る』では本体をなす「史料から探る丹波市域の歴史」である。そこでは古文書の写真を掲げ、ついで釈文・読み下し文、さらに現代語訳と解説を付けるという方式が取られ、事業の進行過程で行なわれたであろう「古文書を読む会の開催」「古文書の展示及び解説セミナーの開催」を彷彿とさせるものがある。

しかし翻ってみた時、なぜ、それらの史料が取り上げられたのか、についてはほとんど解説がなく、読者の憶測に任されている。山南町を代表するのが、どうして「北太田村のからかさ連判状」で、柏原町を代表するのが「維新の混乱と在地代官上山治郎右衛門」か？春日町を代表するのがなぜ、「神

楽川板橋碑」と「棚原天満宮の神宮寺」なのか？想像するに「棚原天満宮の神宮寺」には、調査された庚申堂保管文書とのかかわりがあり、「神楽川板橋碑」は、「元治二年、氷上町域を襲った地震について」と同様、センターが関心を持つ「災害文化」に関する史料だからであろう。

同様に『すがた』に収められた上田捨蔵の編纂にかかる「古文書巻一・二」の二九点から、「花嫁に石」「村と威鉄砲」など五点を選んだ理由は何か、についても一切、言及がない。それが「地域の歴史文化」であることは理解できても、歴史文化のどの分野を構成するかを説明することなく、適宜、取捨選択して済まされるものだろうか？根本的に疑問に感じる。

「災害文化」が地域の歴史文化であることは理解できるが、その他は、どうか。それについての議論がないところに、底の浅さを感じさせるのである。それで「市民」や地元の「皆さん」が納得したのであろうか？

あわせてもう一点不可解なのは、両書に一切、地理情報が図面をふくめてないことである。地元民であれば、地理は分かりきっているのだろうか。しかし、合併で生まれた丹波市である。かりに棚原地区が分かる人でも、青垣町や氷上町については地理情報が必要であろう。神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが当初、不案内な丹波市の各町に入る時に必要としただろう地理情報が、両書に一切ないのはどうしてだろうか？

読者であるわたしは本書を読む過程で、何度、地図帳とにらめっこしただろう。

三

このように本二書は、「地域に残された数多くの古文書の調査」「古文書を読む会の開催」「古文書の展示及び解説セミナーの開催」の軌跡が復元されているという共通の特徴をもつが、『すがた』には例外的に、一篇、専論がある。「棚原天満宮の歴史」である。

創建年代も不明で、寺号についても入り組んだ経緯を持つ棚原天満宮の歴史について、上田捨蔵編纂の『天満宮文書』、新発見の庚申堂保管文書、そして神社本殿の神像調査の成果を駆使した分析として大いに読ませる。地域の古文書をアトランダムに並べた『探る』と比べた時、この専論のお蔭で『すがた』は、読み物としての魅力を持っている。それはおそらく、地元棚原の人々にとって、新発見の事実として歓迎され

たからであろう。ここには〈素人〉の地域住民に対する〈玄人〉の歴史学がある。地域連携には、素人と玄人の共同という難しい作業があるが、素人を、「地域に残された数多くの古文書の調査」「古文書を読む会の開催」「古文書の展示及び解説セミナーの開催」を通じて、玄人の領域に踏み込ませることを可能にするためには、超えなければならないハードルがある。

〈素人〉と〈玄人〉との間には、古文書の解読という技術とともに研究史の咀嚼という作業がある。しかし、『探る』にも『すがた』にも、その作業が十分になされた形跡が見えない。というよりは、筆者がたまたま読んだ（しかも近年の）文献が、中途半端に付けられているだけである。どうして「北太田村のからかさ連判状」（『すがた』）では勝俣鎮夫の『一揆』が、「村と威鉄砲」では藤木久志の『刀狩り』が引用されないのか。また「棚原村と虚無僧」（『すがた』）では、わたしの『国訴と百姓一揆の研究』が引用されないのか。それでいながらなぜ、渡辺尚志『百姓の力』や水林彪『封建制の再編と日本的社会の確立』が、参考文献として明記されるのか。これでは研究史の恣意的利用ではないか。

「いずれにせよ私は、この上田（捨蔵）の事例から、地域史・地域史料への関心を示すことは地域リーダーの一要件たりうるのではないか、と思えてならないのです」という一文（『すがた』二三頁）にいたっては、筆者は、芳賀祥二『史蹟論』を読んでいないのか、と疑う。正直にいってわたしは、筆者たちの勉強不足を怖れる。

なぜなら、こうした地域連携を通じて、「やがて新しい資質を備えた若手研究者を生み出すことになるのではないか」という大きな期待をもつからである。

一九九五年の大震災後、地域史が「行政と大学研究者の指導する市町村史」という構図から、「地元住民主導の地域再生に行政と研究者が参画する」という構図に転換したとしても、「玄人としての歴史学」のやらなければならない課題に変更はない。「むつかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく」（井上ひさし）――という課題が、小説・戯曲だけでなく、歴史学の世界にもあるということを深く認識するだけである。